



Title	第4章 アイヌ民族との交流・アイヌ民族に対する意識と地域的要因
Author(s)	新藤, 慶
Citation	北海道アイヌ民族生活実態調査報告, 4, 95-114
Issue Date	2015-09-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/60112
Type	departmental bulletin paper
File Information	AINUrep04 (8).pdf



第4章 アイヌ民族との交流・アイヌ民族に対する意識と地域的要因

新藤 慶

群馬大学教育学部准教授

はじめに

本章では、札幌市、むかわ町を対象に、これらの地域に暮らす一般住民が、アイヌ民族多住地域としての札幌市、むかわ町をどのように評価しているかを明らかにする。また、これらの地域への評価が、アイヌ民族やアイヌ文化への受け止め方にもたらす影響についても検討する。これらの作業を通じて、今後のアイヌ民族をめぐる状況を地域の視点から考えるための試論を展開したい¹⁾。

第1節 対象地域別に見た地域への評価

まず、札幌市とむかわ町という対象地域別に、地域への評価のあり方を確認する。はじめに、地域別に見た出身地域を表4-1に掲げた。これを見ると、札幌市では「北海道内の他市町村」が54.1%と最も多いことがわかる。むかわ町でも、同じく「北海道内の他市町村」が40.2%と多いが、「現住所以外の市町内」が27.9%、「現住所」が22.1%と、半数がむかわ町の出身であることがわかる。一方、札幌市の場合、札幌市出身者は約3割にとどまっている。いわゆる「地元」出身者は、むかわ町に多いことがわかる。

表4-1 地域別に見た出身地域

	現住所	現住所 以外の 市町内	北海道 内の他 市町村	東北	関東	中部	近畿	中国・ 四国	九州・ 沖縄	外国	N
札幌市	6.8	24.8	54.1	2.8	5.9	1.0	1.9	—	0.9	1.9	577
むかわ町	22.1	27.9	40.2	3.0	2.1	0.6	0.6	0.6	0.2	2.8	530
合計	14.1	26.3	47.4	2.9	4.1	0.8	1.3	0.3	0.5	2.3	1107

p<0.001 (χ^2 検定)

注) 1. 単位=人、%。

2. 不明・無回答を除く。

資料：実態調査より。

次に、地域別に見た居住開始世代を表4-2に掲げた。これを見ると、札幌市では「自分の代」「親の代」とする者が相対的に多いのに対し、むかわ町では「祖父母の代」「祖父母より前」とする者が多い。端的に言えば、札幌市は比較的最近の世代から住み始めたものが多く、むかわ町では3代以上前から暮らしている家が多いということである。

表4-2 地域別に見た居住開始世代

	自分の代	親の代	祖父母の代	祖父母より前	わからない	N
札幌市	53.2	28.2	11.6	5.3	1.8	570
むかわ町	32.3	22.2	28.1	14.9	2.5	523
合計	43.2	25.3	19.5	9.9	2.1	1093

p<0.001 (χ^2 検定)

注) 1. 単位=人、%。

2. 不明・無回答を除く。

資料：実態調査より。

このことは、当然ながら、家族の居住年数にも影響をもたらす。地域別に見た家族の居住年数をまとめた表4-3を見ると、札幌市では40年未満が58.5%に達するのに対し、むかわ町では40年未満は39.7%にとどまっている。「70年以上」も26.9%となっており、むかわ町の方が家族の居住年数は長い。

表4-3 地域別に見た家族の居住年数

	10年未満	10～20年 未満	20～30年 未満	30～40年 未満	40～50年 未満	50～60年 未満	60～70年 未満	70年以上	N
札幌市	12.0	14.3	16.2	16.0	19.3	15.4	1.7	5.0	357
むかわ町	12.7	10.6	7.8	8.6	11.8	8.6	13.1	26.9	245
合計	12.3	12.8	12.8	13.0	16.3	12.6	6.3	14.0	602

$p<.001$ (χ^2 検定)

注) 1. 単位=人、%。

2. 不明・無回答を除く。

資料：実態調査より。

また、自身の居住年数についても、札幌市の場合、40年未満で58.0%を占めるのに対し、むかわ町では37.4%にとどまるなど、やはり札幌市の方で居住年数が短く、むかわ町では長くなっている(表4-4)。ただし、このことは、それぞれの地域の調査対象者の年齢層の違いにも関わっている。札幌市の対象者の平均年齢は51.6歳であるのに対し、むかわ町の対象者の平均年齢は58.0歳となっている。むかわ町の対象者の方で年齢がやや高い分、居住年数も長くなっているところがあると思われる。

表4-4 地域別に見た自身の居住年数

	10年未満	10～20年 未満	20～30年 未満	30～40年 未満	40～50年 未満	50～60年 未満	60～70年 未満	70年以上	N
札幌市	10.6	10.8	16.0	20.6	21.4	13.5	3.9	3.3	519
むかわ町	8.0	6.5	9.5	13.4	14.9	19.3	16.6	11.8	476
合計	9.3	8.7	12.9	17.2	18.3	16.3	9.9	7.3	995

$p<.001$ (χ^2 検定)

注) 1. 単位=人、%。

2. 不明・無回答を除く。

資料：実態調査より。

続いて、地域への評価を7つの項目で尋ねている。このうち、有意差を生じなかったのは、「誰でも自由にものがいえる」である(表4-5)。これを見ると、全体としては「そう思う」(「とてもそう思う」+「ある程度そう思う」、以下同様)が51.4%であり、肯定と否定がほぼ半分ずつとなっている。このことから、農漁村であるむかわ町だからといって、必ずしも発言がしづらいということでもないし、都市的地域である札幌市だからといって、自由に発言できるというわけでもないことがうかがえる。札幌市の場合は、「地域ボス」からなるような地域権力構造が強固に存在しているというより、札幌への根づきが浅い人が多いため、発言手段を持っていないということを示しているのかもしれない。

表4-5 地域別に見た「誰でも自由にものがいえる」への評価

	とてもそう思う	ある程度そう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない	N
札幌市	5.5	44.4	41.2	8.9	563
むかわ町	6.9	46.2	40.5	6.5	509
合計	6.2	45.2	40.9	7.7	1072

$p=.389$ (χ^2 検定)

注) 1. 単位=人、%。

2. 不明・無回答を除く。

資料：実態調査より。

一方、これ以外の項目では、地域による差が生じている。まず、「新しくきた人でもなじみやすい」についての回答をまとめた表4-6を見ると、札幌市の方が若干、「そう思う」という肯定的評価が多くなっている。都市的地域である札幌市の方が、新住民への障壁がやや低いと感じられているものと思われる。

表4-6 地域別に見た「新しくきた人でもなじみやすい」への評価

	とてもそう思う	ある程度そう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない	N
札幌市	7.7	56.4	29.6	6.9	564
むかわ町	5.0	52.5	37.1	5.4	518
合計	6.1	54.5	33.2	6.2	1082

$p<.05$ (χ^2 検定)

注) 1. 単位=人、%。

2. 不明・無回答を除く。

資料：実態調査より。

この札幌市での新住民に対する障壁の低さは、1つには、札幌市の方が新しいものを取り入れる雰囲気が存在していることが関係している。「新しいものを積極的に取り入れる」についての評価をまとめた表4-7を見ると、札幌市の方がやや肯定的評価が高くなっている。このことから、札幌市では、新住民を含めて「新しいもの」が積極的に取り入れられているがゆえに、新住民が移り住みやすいと認識されているものと思われる。

他方で、昔からの習慣が強固には存在していないことも関わっている。「昔からの文化・習慣を大事にする」についての評価をまとめた表4-8を見ると、札幌市では半数以上が否定的評価であるのに対し、むかわ町では半数以上は肯定的評価となっている。さらに、「昔から住んでいる人の意見が強い」についても、同様の結果が示される(表4-9)。このように、札幌市では、昔ながらのやり方があまり強くなく、昔から住んでいる人の意見も強くないからこそ、新住民が移り住みやすいと感じているのだと受けとめられる。

また、新住民への障壁の低さは、もう一方で、近隣の付き合いがあまり密でないことも関わっていることが推測される。「日常的な付き合いが盛ん」についての評価をまとめた表4-10を見ると、むかわ町では肯定的な評価が過半数であるのに対し、札幌市では否定的な評価が過半数となっている。さらに、「住民のまとまりが強い」についても、むかわ町では過半数が肯定、札幌市では過半数が否定となっている(表4-11)。加えて、近所の人たちとの交流をまとめた表4-12からも、札幌市では「互いの家をよく行き来する」や「会った際に世間話をする」といった関わりは、約4分の1の対象者にしか持たれていない一方で、むかわ町では、世間話以上の付き合いがある者が半数以上に達していることがわかる。そのうえ、町内会活動への参加状況をまとめた表4-13を見ても、札幌市では「参加している」側の回答をした者が約3割にとどまっており、あまり積極的なものとなっていないことがうかがえる。これらのことから、札幌市では、日常的な近所付き合いや地域活動があまりないからこそ、新しい住民でも気兼ねなく地域に入ることができるという感覚を持たせているものと考えられる。

表4-7 地域別に見た「新しいものを積極的に取り入れる」への評価

	とてもそう思う	ある程度そう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない	N
札幌市	5.0	41.5	46.1	7.4	564
むかわ町	2.5	31.8	56.9	8.8	510
合計	3.8	36.9	51.2	8.1	1074

p<.01 (χ^2 検定)

注) 1. 単位=人、%。

2. 不明・無回答を除く。

資料：実態調査より。

表4-8 地域別に見た「昔からの文化・習慣を大事にする」への評価

	とてもそう思う	ある程度そう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない	N
札幌市	2.7	32.7	51.7	12.9	559
むかわ町	10.9	47.0	38.4	3.7	513
合計	6.6	39.6	45.3	8.5	1072

p<.001 (χ^2 検定)

注) 1. 単位=人、%。

2. 不明・無回答を除く。

資料：実態調査より。

表4-9 地域別に見た「昔から住んでいる人の意見が強い」への評価

	とてもそう思う	ある程度そう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない	N
札幌市	6.4	28.0	53.0	12.6	564
むかわ町	14.9	46.3	36.7	2.2	510
合計	10.4	36.7	45.3	7.6	1074

p<.001 (χ^2 検定)

注) 1. 単位=人、%。

2. 不明・無回答を除く。

資料：実態調査より。

表4-10 地域別に見た「日常的な付き合いが盛ん」への評価

	とてもそう思う	ある程度そう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない	N
札幌市	3.0	26.7	53.6	16.7	562
むかわ町	5.5	53.3	36.1	5.1	510
合計	4.2	39.4	45.2	11.2	1072

p<.001 (χ^2 検定)

注) 1. 単位=人、%。

2. 不明・無回答を除く。

資料：実態調査より。

表4-11 地域別に見た「住民のまとまりが強い」への評価

	とてもそう思う	ある程度そう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない	N
札幌市	4.6	39.4	46.3	9.8	564
むかわ町	5.7	53.4	36.8	4.1	511
合計	5.1	46.0	41.8	7.1	1075

p<.001 (χ^2 検定)

注) 1. 単位=人、%。

2. 不明・無回答を除く。

資料：実態調査より。

表4-12 地域別に見た近所の人たちとの交流

	互いの家を よく行き来する	会った際に 世間話をする	道であえばあいさつ をかわす程度	近所の住民と 付き合いはない	N
札幌市	1.9	24.8	63.9	9.4	565
むかわ町	10.8	43.0	42.0	4.2	528
合計	6.2	33.6	53.3	6.9	1093

p<.001 (χ^2 検定)

注) 1. 単位=人、%。

2. 不明・無回答を除く。

資料：実態調査より。

表4-13 地域別に見た町内会活動への参加

	積極的に 参加している	ある程度 参加している	あまり 参加していない	まったく 参加していない	N
札幌市	3.8	25.5	30.9	39.7	572
むかわ町	20.9	47.7	20.6	10.8	535
合計	12.1	36.2	25.9	25.7	1107

p<.001 (χ^2 検定)

注) 1. 単位=人、%。

2. 不明・無回答を除く。

資料：実態調査より。

今後の居住希望については、表4-14のとおりである。これを見ると、「いまの場所にずっと住みたい」という希望は札幌市の方が強くなっている。これに対し、「別の場所に移りたい」、あるいは「別の場所に移る予定がある」は、むかわ町の方が高い割合を示している。その詳しい理由を見ると、「いまの場所にずっと住みたい」については、札幌市は「生活環境が良いから」が最も多く70.3%となっている。これに対して、むかわ町では「土地や家があるから」が最も多く70.6%となっている(表4-15)。札幌市は、住む場所として適切だと評価されて、「いまの場所にずっと住みたい」とされやすいのに対し、むかわ町では「土地や家があるから」というやや消極的な理由で居住を継続している状況がうかがえる。

表4-14 地域別に見た今後の居住希望

	いまの場所に ずっと住みたい	別の場所に 移りたい	別の場所に 移る予定がある	わからない	N
札幌市	81.9	6.3	2.5	9.3	558
むかわ町	63.7	14.8	7.3	14.2	521
合計	73.1	10.4	4.8	11.7	1079

p<.001 (χ^2 検定)

注) 1. 単位=人、%。

2. 不明・無回答を除く。

資料：実態調査より。

表4-15 地域別に見た現住所居住希望の理由(複数回答)

	生活環境が 良いから	人間関係が 良いから	親の面倒を 見るため	土地や家が あるから	職場や学校が 近いから	その他	N	M.T. 計
札幌市	70.3	13.7	12.4	51.1	20.9	7.7	468	176.1
むかわ町	27.4	19.0	9.0	70.6	12.0	6.4	343	144.4
合計	52.2	15.9	11.0	59.3	17.1	7.2	811	162.7

注) 1. 単位=人、%。

2. 不明・無回答を除く。

資料：実態調査より。

これに対し、むかわ町から転居を希望する理由としては、「交通の便が悪いから」が53.3%と最も多く、次いで、「生活環境が悪いから」が27.2%となっている（表4－16）。また、むかわ町から転居しなければならない理由は、「転勤があるから」（45.5%）が多くなっている（表4－17）。つまり、むかわ町では、交通や生活環境の面で不便だという事情や、転勤のために、離れたい、もしくは離れねばならないという人が生じている。

なお、転居しなければならない理由の「その他」については、「退職を機に転居」という、転勤とは逆の理由がいくつか見られた。また、「親の介護のため」といった家庭の状況も確認された。ただし、「子どものところへ行きたい」など、確定した予定というよりは、「希望」のレベルにとどまっているものも含まれていた。

表4－16 地域別に見た現住所転居希望の理由（複数回答）

	生活環境が 悪いから	人間関係が 悪いから	交通の便が 悪いから	別の場所に 土地や家があるから	よい仕事がないから	職場や学校 が遠いから	その他	N	M.T. 計
札幌市	18.0	10.0	18.0	2.0	12.0	－	50.0	50	110.0
むかわ町	27.2	15.2	53.3	8.7	21.7	5.4	27.2	92	158.7
合計	23.9	13.4	40.8	6.3	18.3	3.5	35.2	142	141.4

注) 1. 単位＝人、％。

2. 不明・無回答を除く。

資料：実態調査より。

表4－17 地域別に見た現住所転居の理由（複数回答）

	就職するから	転勤があるから	結婚するから	その他	N	M.T. 計
札幌市	13.0	39.1	4.3	43.5	23	100.0
むかわ町	4.5	45.5	－	50.0	44	100.0
合計	7.5	43.3	1.5	47.8	67	100.0

注) 1. 単位＝人、％。

2. 不明・無回答を除く。

資料：実態調査より。

第2節 地域の要因から見たアイヌの人たちとの交流

このように、居住年数、地域への評価、居住希望といった、地域に関する要因のほとんどで、札幌市とむかわ町との間に有意差があった。それでは、このような地域の要因の差は、アイヌ民族との関わりや意識にどのように影響しているのでしょうか。他の章での分析と重なるが、これを地域の要因から行っていきたい。

まず、アイヌの人々との交流について見ていく。まず、地域別・居住開始世代別にみたアイヌの人々との交流を、表4－18に掲げた。札幌市では、アイヌの人々との交流を持つ人自体が極端に少ないので、明瞭な差は生じていない。一方、むかわ町では、「自分の代」からむかわ町に暮らし始めた者では、「よくある」と「たまにある」をあわせて、半数をやや下回る水準であるけれども、「親の代」「祖父母の代」「祖父母より前」の場合は、「よくある」と「たまにある」とする者は半数を超えている。全体としても、とくに「祖父母の代」や「祖父母より前」から居住しているとする者ほど、アイヌの人々との交流が盛んである様子が見られる。このように、むかわ町では、何世代にもわたってむかわ町に暮らしている家の人ほど、アイヌの人々との交流が活発であることがうかがえる。

表4-18 地域別・居住開始世代別に見たアイヌの人々との交流

		よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	N
札幌市	自分の代	0.7	5.0	3.3	91.0	300
	親の代	—	1.3	7.5	91.2	159
	祖父母の代	1.5	1.5	9.2	87.7	65
	祖父母より前	—	—	3.3	96.7	30
	合計	0.5	3.2	5.2	91.0	554
むかわ町	自分の代	18.9	30.5	15.9	34.8	164
	親の代	31.9	39.8	11.5	16.8	113
	祖父母の代	30.4	30.4	20.3	18.8	138
	祖父母より前	32.0	28.0	25.3	14.7	75
	合計	27.1	32.2	17.6	23.1	490
合計	自分の代	7.1	14.0	7.8	71.1	464
	親の代	13.2	17.3	9.2	60.3	272
	祖父母の代	21.2	21.2	16.7	40.9	203
	祖父母より前	22.9	20.0	19.0	38.1	105
	合計	13.0	16.9	11.0	59.1	1044

札幌市： $p<.1$ (χ^2 検定)、むかわ町： $p<.001$ (χ^2 検定)、合計： $p<.001$ (χ^2 検定)

注) 1. 単位＝人、%。

2. 不明・無回答を除く。

資料：実態調査より。

また、地域別・家族の居住年数別に見たものを表4-19に掲げた。札幌市のデータについては有意差が生じていないけれども、むかわ町のデータでは有意差が生じている。これについても、単純な線形の形をとってはいないが、基本的には家族の居住年数が長いほど、アイヌの人々との交流は活発になっている。とくに、「10年未満」では「よくある」が1人もいないのに対し、「70年以上」では「よくある」だけで47.7%に達していることは非常に対照的である。

さらに、地域別・自身の居住年数別でのアイヌの人々との交流をまとめた表4-20を見ると、むかわ町では居住年数が長いほどアイヌの人々との交流が活発になる様子がうかがえる。ただし、表4-19と比べると、若干、差が小さくなっているようにも感じられる。このことをふまえれば、居住年数については、自身の居住年数よりも、家族の居住年数による影響が強いのかかもしれない。そこには、自分自身がアイヌの人々との関係を築くということにだけでなく、家族で受け継がれてきた交流に乗っかって、アイヌの人々との関わりが生じるという状況も考えられるかもしれない。

続いて、地域への評価との関連として、近所の人たちとの交流の認識とアイヌの人々との交流を示したものを表4-21にまとめた。これを見ると、近所付き合いが盛んであるほど、アイヌの人々との交流も盛んになっている状況がわかる。つまり、アイヌの人々との交流も、一般的な近所付き合いと同じように営まれていることがうかがえる。

これ以外に地域への評価で有意差を生じた項目は、「新しく来た人でもなじみやすい」(札幌市： $p=.740$ (χ^2 検定)、むかわ町： $p<.01$ (χ^2 検定)、合計： $p<.05$ (χ^2 検定))、「誰でも自由にものが言える」(札幌市： $p=.135$ (χ^2 検定)、むかわ町： $p<.001$ (χ^2 検定)、合計： $p<.01$ (χ^2 検定))、「日常的な付き合いが盛ん」(札幌市： $p=.362$ (χ^2 検定)、むかわ町： $p<.01$ (χ^2 検定)、合計： $p<.001$ (χ^2 検定))、「昔から住んでいる人の意見が強い」(札幌市： $p<.05$ (χ^2 検定)、むかわ町： $p<.05$ (χ^2 検定)、合計： $p<.001$ (χ^2 検定))、「新しいものを積極的に取り入れる気風がある」(札幌市： $p=.176$ (χ^2 検定)、むかわ町： $p<.01$ (χ^2 検定)、合計： $p=.235$ (χ^2 検定))と、「町内会への参加状況」(札

幌市： $p<.1$ (χ^2 検定)、むかわ町： $p<.001$ (χ^2 検定)、合計： $p<.001$ (χ^2 検定))である。「昔から住んでいる人の意見が強い」は、これを否定する人ほどアイヌの人々との交流が活発であった。これ以外の項目は、肯定的な評価が高いほど、アイヌの人々との交流が盛んになっていた。つまり、現在住んでいる地域が、開放的で、「新住民」という尋ね方ではあるけれども、従来の地域には「異質」な人々を受け入れる素地があると感じている人ほど、アイヌの人々との交流も活発なものとなっている。居住地域でアイヌの人々との交流も当然のものとして受けとめられているか否かが、住民のアイヌの人々との交流に影響を与えるものと思われる。

表4－19 地域別・家族の居住年数別に見たアイヌの人々との交流

		よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	N
札幌市	10年未満	2.3	4.7	—	93.0	43
	10～20年未満	—	3.9	3.9	92.2	51
	20～30年未満	—	3.5	3.5	93.0	57
	30～40年未満	—	7.0	7.0	86.0	57
	40～50年未満	1.5	1.5	9.2	87.7	65
	50～60年未満	—	3.6	7.3	89.1	55
	60～70年未満	—	—	16.7	83.3	6
	70年以上	—	—	—	100.0	18
	合計	0.6	3.7	5.4	90.3	352
むかわ町	10年未満	—	22.6	6.5	71.0	31
	10～20年未満	23.1	30.8	15.4	30.8	26
	20～30年未満	11.8	29.4	23.5	35.3	17
	30～40年未満	33.3	38.1	19.0	9.5	21
	40～50年未満	31.0	37.9	17.2	13.8	29
	50～60年未満	21.1	42.1	21.1	15.8	19
	60～70年未満	32.3	32.3	19.4	16.1	31
	70年以上	47.7	33.8	12.3	6.2	65
	合計	28.9	33.1	15.5	22.6	239
合計	10年未満	1.4	12.2	2.7	83.8	74
	10～20年未満	7.8	13.0	7.8	71.4	77
	20～30年未満	2.7	9.5	8.1	79.7	74
	30～40年未満	9.0	15.4	10.3	65.4	78
	40～50年未満	10.6	12.8	11.7	64.9	94
	50～60年未満	5.4	13.5	10.8	70.3	74
	60～70年未満	27.0	27.0	18.9	27.0	37
	70年以上	37.3	26.5	9.6	26.5	83
	合計	12.0	15.6	9.5	62.9	591

札幌市： $p=.740$ (χ^2 検定)、むかわ町： $p<.001$ (χ^2 検定)、合計： $p<.001$ (χ^2 検定)

注) 1. 単位＝人、％。

2. 不明・無回答を除く。

資料：実態調査より。

今後の居住希望別にアイヌの人々との交流の状況をまとめたものを、表4－22に掲げる。これを見ると、「いまの場所にずっと住みたい」という人ほどアイヌの人々との交流も活発であることがわかる。むかわ町の場合、「いまの場所にずっと住みたい」とする者は「土地や家があるから」という理由が多く、別の場所に移りたい、もしくは別の場所に移る予定があるとする者は、交通の便や生活環境の悪さ、あるいは転勤しなければならない状況を指摘していた（表4－15～17）。むかわ町に拠点があり、今後もむかわ町で暮らそうという人々はアイヌの人々との交流が盛んであ

表4-20 地域別・自身の居住年数別に見たアイヌの人々との交流

		よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	N
札幌市	10年未満	1.8	9.1	—	89.1	55
	10～20年未満	—	3.6	—	96.4	56
	20～30年未満	—	1.2	3.7	95.1	82
	30～40年未満	—	2.8	9.4	87.7	106
	40～50年未満	0.9	1.9	8.3	88.9	108
	50～60年未満	—	2.9	5.8	91.3	69
	60～70年未満	5.0	—	5.0	90.0	20
	70年以上	—	—	—	100.0	17
	合計	0.6	2.9	5.3	91.2	513
むかわ町	10年未満	—	21.6	10.8	67.6	37
	10～20年未満	22.6	35.5	9.7	32.3	31
	20～30年未満	19.0	19.0	21.4	40.5	42
	30～40年未満	25.0	25.0	23.4	26.6	64
	40～50年未満	31.9	33.3	21.7	13.0	69
	50～60年未満	30.7	39.8	17.0	12.5	88
	60～70年未満	39.7	28.8	19.2	12.3	73
	70年以上	37.0	42.6	16.7	3.7	54
	合計	28.2	31.7	18.3	21.8	458
合計	10年未満	1.1	14.1	4.3	80.4	92
	10～20年未満	8.0	14.9	3.4	73.6	87
	20～30年未満	6.5	7.3	9.7	76.6	124
	30～40年未満	9.4	11.2	14.7	64.7	170
	40～50年未満	13.0	14.1	13.6	59.3	177
	50～60年未満	17.2	23.6	12.1	47.1	157
	60～70年未満	32.3	22.6	16.1	29.0	93
	70年以上	28.2	32.4	12.7	26.8	71
	合計	13.6	16.5	11.4	58.5	971

札幌市：p<.05 (χ^2 検定)、むかわ町：p<.001 (χ^2 検定)、合計：p<.001 (χ^2 検定)

注) 1. 単位=人、%。

2. 不明・無回答を除く。

資料：実態調査より。

表4-21 地域別・近所の人たちとの交流別に見たアイヌの人々との交流

		よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	N
札幌市	互いの家をよく行き来する	—	—	9.1	90.9	11
	会った際に世間話をする	0.7	3.6	4.3	91.4	140
	道であえばあいさつをかわす程度	0.6	2.8	5.8	90.8	360
	近所の住民と付き合いはない	—	3.8	1.9	94.3	53
	合計	0.5	3.0	5.1	91.3	564
むかわ町	互いの家をよく行き来する	52.8	30.2	13.2	3.8	53
	会った際に世間話をする	32.4	33.8	16.2	17.6	222
	道であえばあいさつをかわす程度	16.3	31.6	20.0	32.1	215
	近所の住民と付き合いはない	4.5	22.7	13.6	59.1	22
	合計	26.6	32.0	17.4	24.0	512
合計	互いの家をよく行き来する	43.8	25.0	12.5	18.8	64
	会った際に世間話をする	20.2	22.1	11.6	46.1	362
	道であえばあいさつをかわす程度	6.4	13.6	11.1	68.9	575
	近所の住民と付き合いはない	1.3	9.3	5.3	84.0	75
	合計	12.9	16.8	11.0	59.3	1076

札幌市：p=.960 (χ^2 検定)、むかわ町：p<.001 (χ^2 検定)、合計：p<.001 (χ^2 検定)

注) 1. 単位=人、%。

2. 不明・無回答を除く。

資料：実態調査より。

り、転居の予定や希望がある人は、あまりアイヌの人々との交流がなされない状況にある。「むかわ町で生活していく」という見通しが、アイヌの人々との関わりをもたらししているとも考えられる。

表4－22 地域別・居住希望別に見たアイヌの人々との交流

		よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	N
札幌市	いまの場所にずっと住みたい	0.7	3.6	5.6	90.2	449
	別の場所に移りたい	－	－	8.6	91.4	35
	別の場所に移る予定がある	－	7.7	－	92.3	13
	合計	0.6	3.4	5.6	90.3	497
むかわ町	いまの場所にずっと住みたい	31.2	36.0	20.1	12.7	314
	別の場所に移りたい	21.3	32.0	14.7	32.0	75
	別の場所に移る予定がある	8.3	25.0	8.3	58.3	36
	合計	27.5	34.4	18.1	20.0	425
合計	いまの場所にずっと住みたい	13.2	16.9	11.5	58.3	763
	別の場所に移りたい	14.5	21.8	12.7	50.9	110
	別の場所に移る予定がある	6.1	20.4	6.1	67.3	49
	合計	13.0	17.7	11.4	57.9	922

札幌市： $p=0.741$ （ χ^2 検定）、むかわ町： $p<0.001$ （ χ^2 検定）、合計： $p<0.001$ （ χ^2 検定）

注）1. 単位＝人、％。

2. 不明・無回答を除く。

資料：実態調査より。

第3節 地域の要因から見たアイヌ文化の保存に対する意識

次に、地域の要因とアイヌ文化の保存に対する意識との関連を見てみたい。まず、居住年数については、有意差は生じていなかった。このことから、アイヌ文化の保存に対する意識には、アイヌの人々が多く暮らす地域にどのくらい長く生活しているかということは、あまり影響を与えていないことがうかがえる。

地域への評価については、いくつかの項目で有意差が生じた。まず、「昔からの文化・習慣を大事にする」に対する評価とアイヌ文化の保存との関係を表4－23に掲げた。これを見ると、「昔からの文化・習慣を大事にする」地域であると考えている人ほど、「アイヌ文化を積極的に保存すべき」とも考えていることがわかる。このことは、「昔からの文化」のなかにアイヌ文化も位置づいているととらえることができる。「昔からの文化を大切に土地柄で、アイヌ文化は昔からの文化なのだから、積極的に保存すべき」との発想である。

一方、「新しいものを積極的に取り入れる」についての評価別に見た集計結果を表4－24に掲げた。これを見ても、「新しいものを積極的に取り入れる」土地柄だと感じている者ほど、アイヌ文化の保護にも積極的であることがわかる。ここでは、アイヌ文化は、「新しいもの」との相同性を持っている。表4－23では、「昔からの文化」とアイヌ文化が同様に扱われていた。このように、アイヌ文化をめぐるのは、「昔からの文化」であり、かつ「新しいもの」とも受けとめられているという両義的な性格を持っている。ここには、先住民をめぐる「本質主義」と、それへのアンチテーゼとが同時にみられる。大村啓一は、先住民をめぐる「本質主義」について、次のように述べている。

表4-23 地域別・「昔からの文化・習慣を大事にする」への評価別に見た「アイヌ文化を積極的に保存すべき」の意識

	アイヌ文化 昔からの文化	アイヌ文化				N
		そう思う	ある程度 そう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない	
札幌市	とてもそう思う	53.3	40.0	6.7	—	15
	ある程度そう思う	42.6	49.7	5.5	2.2	183
	あまりそう思わない	43.6	48.4	8.0	—	289
	まったくそう思わない	42.3	42.3	5.6	9.9	71
	合計	43.4	47.8	6.8	2.0	558
むかわ町	とてもそう思う	51.9	40.7	3.7	3.7	54
	ある程度そう思う	30.8	51.7	13.3	4.2	240
	あまりそう思わない	22.1	46.7	24.1	7.2	195
	まったくそう思わない	26.3	26.3	21.1	26.3	19
	合計	29.5	47.6	16.7	6.1	508
合計	とてもそう思う	52.2	40.6	4.3	2.9	69
	ある程度そう思う	35.9	50.8	9.9	3.3	423
	あまりそう思わない	34.9	47.7	14.5	2.9	484
	まったくそう思わない	38.9	38.9	8.9	13.3	90
	合計	36.8	47.7	11.5	3.9	1066

札幌市：p<.001 (χ^2 検定)、むかわ町：p<.001 (χ^2 検定)、合計：p<.001 (χ^2 検定)

注) 1. 単位=人、%。

2. 不明・無回答を除く。

資料：実態調査より。

もし、ある先住民族に関する「正しい」情報なるものが、あらかじめ定められた「民族」の「伝統」的な「文化」を基準にした情報であるとすれば、たとえ変化しつつある先住民社会の現状を記述するとしても、それは「サルベージ的」、あるいは「帝国主義的ノスタルジア」とも呼ばれる本質主義的な記述の典型となってしまうのではないだろうか（本多ほか 2005：325）

このように、先住民の生活や文化のあり方には、ある「本質」を想定し、そこから逸脱したものを先住民の生活や文化とは認めない「本質主義」と呼ばれる立場がある。これに対し、先住民の生活や文化には、新しく創造される部分があり、時代によって変化するものととらえる立場がある。とくに、先住民の生活や文化は、国民国家の成立以後、抑圧されてきたことにより変容せざるをえなかったという側面がある。その流れの一つとして、本研究グループで同時に研究を進めている北欧の先住民サーミにみられる復権と再生の動きも位置づけることができる（小内 2013）。これらの「本質主義」とアンチ「本質主義」の両者から見れば、アイヌ文化は「昔からの文化」でありかつ「新しいもの」と受けとめられうるといえる。

ただし、前節でも触れたように、ここでいう「新しい」とは、「自分たちの日常的なものとは異なる」という意味合いを持っているとも考えられる。つまり、「昔からの文化」であり、「自分たちの日常的なものとは異なる」ものを重視している土地柄であれば、アイヌ文化も積極的に保護すべきという考え方になるということである。

また、このほかに地域への評価で有意差を生じた項目は、「住民のまとまりが強い」（札幌市：p=.920 (χ^2 検定)、むかわ町：p<.01 (χ^2 検定)、合計：p<.05 (χ^2 検定))、「新しくきた人でもなじみやすい」（札幌市：p<.01 (χ^2 検定)、むかわ町：p<.01 (χ^2 検定)、合計：p<.001 (χ^2 検定))、「昔から住んでいる人の意見が強い」（札幌市：p=.207 (χ^2 検定)、むかわ町：p<.01 (χ^2 検定)、合計：

$p<.05$ (χ^2 検定))、「町内会活動への参加」(札幌市: $p=.542$ (χ^2 検定)、むかわ町: $p<.05$ (χ^2 検定)、合計: $p=.473$ (χ^2 検定))であった。このうち、「住民のまとまりが強い」については、アイヌの人々を含めて「住民」とする認識が強いこと、「新しくきた人」は、先述のように「自分たちとは異なる人」という意識だと推測されることが、アイヌ文化を積極的に保護すべきとの考えに結びつくものと考えられる。

一方、「昔から住んでいる人の意見が強い」については、これを肯定する人ほど、アイヌ文化を保護すべきだと考えていた。ここから考えると、「昔から住んでいる人」に、アイヌの人々も含まれる可能性が考えられる。たしかに、アイヌの人々は、「昔から住んでいる人」に間違いはない。しかし、ここでいう「昔から住んでいる人」は、単に長い期間暮らしているというだけではなく、「その地域の有力者」であるというニュアンスをも持つ表現だと考えられる。アイヌの人々が「その地域の有力者」と位置づけられるかはわからないが、アイヌ民族内にも階層差があり、その上下関係で民族内差別がなされてきた状況も報告されている(濱田 2012)。また、白糠町では、漁業の「親方」として、地域の有力者となっていたアイヌ民族の人々が少なくないことも聞かれた(新藤 2015)。これらの点から、「その地域の有力者」にも一定のアイヌ民族が想定されており、そのことが、その地域でのアイヌ文化保護にもつながると考えられている部分もあると推測される。

表4-24 地域別・「新しいものを積極的に取り入れる」への評価別に見た「アイヌ文化を積極的に保存すべき」の意識

	アイヌ文化 新しいもの					N
		そう思う	ある程度 そう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない	
札幌市	とてもそう思う	57.1	32.1	10.7	—	28
	ある程度そう思う	49.6	43.6	5.1	1.7	234
	あまりそう思わない	38.6	54.1	6.9	0.4	259
	まったくそう思わない	26.2	47.6	11.9	14.3	42
	合計	43.2	28.1	6.7	2.0	563
むかわ町	とてもそう思う	61.5	23.1	7.7	7.7	13
	ある程度そう思う	34.8	45.6	13.3	6.3	158
	あまりそう思わない	25.6	50.9	19.4	4.2	289
	まったくそう思わない	26.7	40.0	15.6	17.8	45
	合計	29.5	47.5	16.8	6.1	505
合計	とてもそう思う	58.5	29.3	9.8	2.4	41
	ある程度そう思う	43.6	44.4	8.4	3.6	392
	あまりそう思わない	31.8	52.4	13.5	2.4	548
	まったくそう思わない	26.4	43.7	13.8	16.1	87
	合計	36.7	47.8	11.5	3.9	1068

札幌市： $p<.001$ (χ^2 検定)、むかわ町： $p<.001$ (χ^2 検定)、合計： $p<.001$ (χ^2 検定)

注) 1. 単位=人、%。

2. 不明・無回答を除く。

資料：実態調査より。

今後の居住希望別に見たアイヌ文化の保護についての意識を、表4-25にまとめた。これを見ると、むかわ町では、「別の場所に移りたい」とするもので、「そう思う」と「ある程度そう思う」の合計が7割を下回るなど、やや低くなっている。逆に言うと、「いまの場所にずっと住みたい」と感じている人々は、この地域で暮らしているアイヌ民族の人々の文化を保護することは望ましいと考えているし、「別の場所に移る予定がある」とする転勤族なども、文化についてはその保護が求められると考えている。居住地域の文化と、一般的な文化と、居住希望によって念頭に置かれる

文化は異なるが、いずれも住民の意識をアイヌ文化の保護に向かわせることになっている。

表4－25 地域別・居住希望別に見た「アイヌ文化を積極的に保護すべき」の意識

	居住希望	アイヌ文化				N
		そう思う	ある程度 そう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない	
札幌市	いまの場所にずっと住みたい	44.7	47.8	6.2	1.3	450
	別の場所に移りたい	62.9	28.6	5.7	2.9	35
	別の場所に移る予定がある	15.4	76.9	7.7	—	13
	合計	45.2	47.2	6.2	1.4	498
むかわ町	いまの場所にずっと住みたい	34.7	46.6	14.4	4.3	326
	別の場所に移りたい	16.0	52.0	20.0	12.0	75
	別の場所に移る予定がある	33.3	50.0	16.7	—	36
	合計	31.4	47.8	15.6	5.3	437
合計	いまの場所にずっと住みたい	40.5	47.3	9.7	2.6	776
	別の場所に移りたい	30.9	44.5	15.5	9.1	110
	別の場所に移る予定がある	28.6	57.1	14.3	—	49
	合計	38.7	47.5	10.6	3.2	935

札幌市： $p<.1$ (χ^2 検定)、むかわ町： $p<.01$ (χ^2 検定)、合計： $p<.01$ (χ^2 検定)

注) 1. 単位＝人、%。

2. 不明・無回答を除く。

資料：実態調査より。

第4節 地域の要因から見たアイヌ民族への経済的援助の評価

さらに、ここではアイヌ民族への経済的援助の評価を検討したい。白糠町での調査では、「アイヌ文化振興は許容できるが、経済的援助は許容できない」という一般住民の意識が見えてきていた(新藤 2015)。そこで、アイヌ文化を扱った前節との対比で、アイヌ民族への経済的援助の評価を検討したい。

まず、家族の居住年数との関係をまとめたものを、表4－26に掲げる。このなかで、とくにむかわ町に着目すると、札幌市に比べて全体的に肯定的な意見が少ないが、家族の居住年数が長いほど肯定的な意見が少なくなっていることがわかる。この点は、アイヌの人々との交流をまとめた表4－19と対比すると興味深い。表4－19では、家族の居住年数が長いほど、アイヌの人々との交流はむしろ活発になっていた。それゆえ、ここでの経済的援助への否定的な見解は、アイヌの人々との接点がないがゆえの無理解などにもとづくものではない。むしろ、日常的に交流しているからこそ、「アイヌ民族への経済的援助はいらない」と判断しているものと思われる。これは、日常的な交流から、労働や生活の状況もつかめており、そこには特段の経済的援助が必要だとの認識は持たれなかったということであろう。逆に、日常的な交流に乏しい居住年数の短い人々、あるいは札幌市民の方で、経済的支援が必要との意識が高いのは、アイヌの人々の生活実態をよく把握していないからだといえるのかもしれない。

しかし、客観的なデータに基づけば、アイヌ民族は一般の北海道民と比べて、年収で100万円くらい低い水準となっている(野崎 2014)。それを、アイヌ民族であるがゆえの結果ととらえるか、単に個人的な状況が招いたものととらえるかは議論が分かれるが、少なくとも、むかわ町で長くアイヌ民族の人々と関わっている人たちには、経済的援助が必要な状況には見えないということである。

表4-26 地域別・家族の居住年数別に見た「アイヌ民族に対する経済的な援助をすべき」の意識

		そう思う	ある程度 そう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない	N
札幌市	10年未満	16.7	33.3	45.2	4.8	42
	10～20年未満	16.3	30.6	34.7	18.4	49
	20～30年未満	3.8	34.0	50.9	11.3	53
	30～40年未満	21.4	42.9	33.9	1.8	56
	40～50年未満	16.4	45.9	32.8	4.9	61
	50～60年未満	28.0	40.0	26.0	6.0	50
	60～70年未満	20.0	40.0	20.0	20.0	5
	70年以上	13.3	60.0	20.0	6.7	15
	合計	16.9	39.3	36.0	7.9	331
むかわ町	10年未満	13.8	27.6	34.5	24.1	29
	10～20年未満	12.0	16.0	44.0	28.0	25
	20～30年未満	—	11.1	66.7	22.2	18
	30～40年未満	15.0	25.0	40.0	20.0	20
	40～50年未満	3.6	3.6	78.6	14.3	28
	50～60年未満	5.9	41.2	47.1	5.9	17
	60～70年未満	—	10.7	46.4	42.9	28
	70年以上	7.8	20.3	46.8	25.0	64
	合計	7.4	18.8	49.8	24.0	229
合計	10年未満	15.5	31.0	40.8	12.7	71
	10～20年未満	14.9	25.7	37.8	21.6	74
	20～30年未満	2.8	28.2	54.9	14.1	71
	30～40年未満	19.7	38.2	35.5	6.6	76
	40～50年未満	12.4	32.6	47.2	7.9	89
	50～60年未満	22.4	40.3	31.3	6.0	67
	60～70年未満	3.0	15.2	42.4	39.4	33
	70年以上	8.9	27.8	41.8	21.5	79
	合計	13.0	30.9	41.6	14.5	560

札幌市： $p<.05$ (χ^2 検定)、むかわ町： $p<.05$ (χ^2 検定)、合計： $p<.001$ (χ^2 検定)

注) 1. 単位＝人、％。

2. 不明・無回答を除く。

資料：実態調査より。

次に、地域への評価との関連については、「住民のまとまりが強い」との関連を表4-27に掲げた。これを見ると、「住民のまとまりが強い」地域だと受け止めている人ほど、アイヌ民族への経済的支援をすべきと考えていることがわかる。また、これ以外の地域への評価でアイヌ民族への経済的な援助の意識に有意差を生じた項目は、「新しく来た人でもなじみやすい」(札幌市： $p=.140$ (χ^2 検定)、むかわ町： $p<.05$ (χ^2 検定)、合計： $p<.05$ (χ^2 検定))、「誰でも自由にものが言える」(札幌市： $p=.119$ (χ^2 検定)、むかわ町： $p<.01$ (χ^2 検定)、合計： $p<.01$ (χ^2 検定))、「新しいものを積極的に取り入れる」(札幌市： $p<.1$ (χ^2 検定)、むかわ町： $p<.01$ (χ^2 検定)、合計： $p<.001$ (χ^2 検定))である。いずれも、地域への評価が肯定的であるほど、アイヌ民族への経済的支援をすべきだと思える傾向が強い。つまり、現在居住している地域はまとまりがあり、新しい人やものも受け入れていると評価されていれば、アイヌ民族への経済的支援も肯定されるという図式が見出される。

表4-27 地域別・住民のまとまりが強い」への評価別に見た「アイヌ民族に対する経済的な援助をすべき」の意識

	経済的支援 住民のまとまり					N
		そう思う	ある程度 そう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない	
札幌市	とてもそう思う	37.5	25.0	33.3	4.2	24
	ある程度そう思う	16.3	46.9	30.1	6.7	209
	あまりそう思わない	14.4	34.0	45.6	6.0	250
	まったくそう思わない	8.2	22.4	51.0	18.4	49
	合計	15.6	37.6	39.5	7.3	532
むかわ町	とてもそう思う	26.1	26.1	26.1	21.7	23
	ある程度そう思う	6.7	18.7	52.0	22.6	252
	あまりそう思わない	7.4	12.6	47.4	32.6	175
	まったくそう思わない	15.8	5.3	31.6	47.4	19
	合計	8.3	16.2	48.2	27.3	469
合計	とてもそう思う	31.9	25.5	29.8	12.8	47
	ある程度そう思う	11.1	31.5	42.1	15.4	461
	あまりそう思わない	11.5	25.2	46.4	16.9	425
	まったくそう思わない	10.3	17.6	45.6	26.5	68
	合計	12.2	27.6	43.6	16.7	1001

札幌市：p<.001（ χ^2 検定）、むかわ町：p<.01（ χ^2 検定）、合計：p<.01（ χ^2 検定）

注）1. 単位=人、%。

2. 不明・無回答を除く。

資料：実態調査より。

また、今後の居住希望との関連を、表4-28にまとめた。これを見ると、むかわ町では、「別の場所に移る予定がある」という層で経済的援助への肯定度が高くなっている。「いまの場所にずっと住みたい」という人々が必ずしも経済的援助を肯定しないのは、家族の居住年数が長い者が経済的援助を肯定しないのと同様の構造を示していると考えられる。

表4-28 地域別・居住希望別に見た「アイヌ民族に対する経済的援助をすべき」の意識

	経済的支援 居住希望					N
		そう思う	ある程度 そう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない	
札幌市	いまの場所にずっと住みたい	15.9	39.9	38.2	5.9	421
	別の場所に移りたい	20.6	32.4	32.4	14.7	34
	別の場所に移る予定がある	8.3	25.0	66.7	—	12
	合計	16.1	39.0	38.5	6.4	467
むかわ町	いまの場所にずっと住みたい	7.9	16.9	50.3	24.8	290
	別の場所に移りたい	11.3	5.6	43.7	39.4	71
	別の場所に移る予定がある	11.8	29.4	32.4	26.5	34
	合計	8.9	15.9	47.6	27.6	395
合計	いまの場所にずっと住みたい	12.7	30.5	43.2	13.6	711
	別の場所に移りたい	14.3	14.3	40.0	31.4	105
	別の場所に移る予定がある	10.9	28.3	41.3	19.6	46
	合計	12.8	28.4	42.7	16.1	862

札幌市：p=.156（ χ^2 検定）、むかわ町：p<.05（ χ^2 検定）、合計：p<.001（ χ^2 検定）

注）1. 単位=人、%。

2. 不明・無回答を除く。

資料：実態調査より。

ただし、もう1つ取り上げたいのは、「昔からの文化・習慣を大事にする」の意識との関連である。この点をまとめた表4-29を見ると、とくにむかわ町では、やや特徴的な形態を示している。基本的には「昔からの文化・習慣を大事にする」地域だとの認識が強いほど、アイヌ民族への経済

的な援助をすべきとの考えを肯定する者が多い。この点は、アイヌ文化の保護をめぐる意識をまとめた表4-23と同様である。ただし、「昔からの文化・習慣を大事にする」と「まったく思わない」層でも、アイヌ民族への経済的援助をすべきという考えに「そう思う」と回答している者が少なくない。この点は、アイヌ民族への経済的援助への意識は、アイヌ文化の保護とは異なったメカニズムによっても規定されていることがうかがわれる。これについては、後ほど改めて検討する。

表4-29 地域別・「昔からの文化・習慣を大事にする」への評価別に見た「アイヌ民族に対する経済的な援助をすべき」の意識

	経済的支援 昔からの文化	そう思う	ある程度 そう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない	N
札幌市	とてもそう思う	61.5	15.4	23.1	—	13
	ある程度そう思う	15.6	43.4	33.5	7.5	173
	あまりそう思わない	11.2	38.8	43.9	6.1	278
	まったくそう思わない	22.7	24.2	39.4	13.6	66
	合計	15.3	37.9	39.4	7.4	530
むかわ町	とてもそう思う	20.0	22.2	31.1	26.7	45
	ある程度そう思う	9.9	18.5	49.1	22.5	222
	あまりそう思わない	2.2	13.6	50.5	33.7	184
	まったくそう思わない	17.6	5.9	52.9	23.5	17
	合計	8.1	16.5	48.1	27.4	468
合計	とてもそう思う	29.3	20.7	29.3	20.7	58
	ある程度そう思う	12.4	29.4	42.3	15.9	395
	あまりそう思わない	7.6	28.8	46.5	17.1	462
	まったくそう思わない	21.7	20.5	42.2	15.7	83
	合計	11.9	27.9	43.5	16.7	988

札幌市： $p<.001$ (χ^2 検定)、むかわ町： $p<.001$ (χ^2 検定)、合計： $p<.001$ (χ^2 検定)

注) 1. 単位=人、%。

2. 不明・無回答を除く。

資料：実態調査より。

第5節 地域の要因から見たアイヌ民族への教育支援の評価

続いて、本節では地域の要因とアイヌ民族への教育支援の評価との関係を見たい。アイヌ民族については、和人ととの間に教育達成の差が生じていることが指摘されている。2008年に北海道大学アイヌ・先住民研究センターで実施された調査によれば、高校進学率については、最近ではほとんど差がなくなっている。しかし、大学進学率については2005年でも27.1%と、全国平均の5分の3程度にとどまっている。また、中退率が高く、高校中退率は12.9%で全国平均の約6倍、大学中退率は20.3%で全国平均の約9倍の水準となっている(野崎 2012: 61)。このように、アイヌ民族の場合、教育機会が必ずしも保障されていない側面がある。そのため、アイヌ民族への教育支援が必要だとの考え方も生じる。この点について、アイヌ民族多住地域の一般住民は、どのように考えているのだろうか。

まず、居住世代や居住年数との関係を検討した結果、それぞれの地域内では、有意差は生じていなかった。ただし、家族の居住年数については全体の分析では有意差が見られ(札幌市： $p=.140$ (χ^2 検定)、むかわ町： $p=.404$ (χ^2 検定)、合計： $p<.01$ (χ^2 検定))、居住世代が新しく、家族の居住年数が短いほど、教育支援をすべきと考える傾向が強く、居住世代が古く、家族の居住年数が長いほど、教育支援をすべきでないと考えている人が多かった。このことは、居住世代が新しく、家族の居住年数が短い札幌市では教育支援をすべきと考える人が多く、居住世代が古く、家

族の居住年数が長いむかわ町の人々は教育支援をすべきでないとするケースが多いという地域の差が存在することを意味していると考えられる。

次に、地域への評価に関わって、「住民のまとまりが強い」との関連を表4-30にまとめた。これを見ると、むかわ町では、「住民のまとまりが強い」と考えている人ほど、アイヌ民族への教育支援をすべきとする傾向が強いことが見て取れる。これ以外の地域への評価でアイヌ民族への経済的な援助の意識に有意差を生じた項目は、「新しく来た人でもなじみやすい」(札幌市： $p=.173$ (χ^2 検定)、むかわ町： $p<.05$ (χ^2 検定)、合計： $p<.01$ (χ^2 検定))、「誰でも自由にものが言える」(札幌市： $p=.369$ (χ^2 検定)、むかわ町： $p<.05$ (χ^2 検定)、合計： $p<.05$ (χ^2 検定))、「日常的な付き合いが盛ん」(札幌市： $p<.1$ (χ^2 検定)、むかわ町： $p<.1$ (χ^2 検定)、合計： $p<.1$ (χ^2 検定))、「町内会活動への参加」(札幌市： $p<.05$ (χ^2 検定)、むかわ町： $p<.1$ (χ^2 検定)、合計： $p<.001$ (χ^2 検定))である。いずれも肯定度が高い、または積極的なものになっているほど、アイヌ民族への教育支援をすべきと考える人が多くなっている。

表4-30 地域別・「住民のまとまりが強い」への評価別に見た「アイヌ民族に対する教育支援をすべき」の意識

教育支援 住民のまとまり		そう思う	ある程度 そう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない	N
札幌市	とてもそう思う	50.0	25.0	25.0	—	24
	ある程度そう思う	29.3	43.8	22.1	4.8	208
	あまりそう思わない	25.3	41.8	28.5	4.4	249
	まったくそう思わない	18.0	50.0	24.0	8.0	50
	合計	27.3	42.6	25.4	4.7	531
むかわ町	とてもそう思う	32.0	28.0	24.0	16.0	25
	ある程度そう思う	11.8	27.5	44.7	16.1	255
	あまりそう思わない	10.8	21.0	46.0	22.2	176
	まったくそう思わない	10.5	10.5	36.8	42.1	19
	合計	12.4	24.4	43.8	19.4	475
合計	とてもそう思う	40.8	26.5	24.5	8.2	49
	ある程度そう思う	19.7	34.8	34.6	11.0	463
	あまりそう思わない	19.3	33.2	35.8	11.8	425
	まったくそう思わない	15.9	39.1	27.5	17.4	69
	合計	20.3	34.0	34.1	11.6	1006

札幌市： $p=.142$ (χ^2 検定)、むかわ町： $p<.05$ (χ^2 検定)、合計： $p<.05$ (χ^2 検定)

注) 1. 単位=人、%。

2. 不明・無回答を除く。

資料：実態調査より。

ただし、有意差が生じているが、これらの項目とは異なる傾向を示すのが、経済的支援の部分でもみた「昔からの文化・習慣を大事にする」である。この項目との関連を表4-31にまとめた。これを見ると、基本的には「昔からの文化・習慣を大事にする」地域だと認識している人ほど、教育支援をすべきと考えていることがわかる。ただし、むかわ町については、表4-29の経済的支援の場合と同様、「まったくそう思わない」人々でも、教育支援をすべきと考えている人が少なくない。これらの点をふまえると、まずは「昔からの文化・習慣を大事にする」地域だと考えている人々は、昔からの文化・習慣を受け継いできたアイヌ民族の人々への支援は、その地域の特性に照らして、経済的なものも、教育的なものも重視されるべきだと考えていることがうかがえる。その一方で、「昔からの文化・習慣を大事にする」地域だと考えていない人々は、昔からの文化・習慣

が大事にされていないからこそ、昔からの文化・習慣を受け継いできたアイヌ民族への経済的・教育的支援が必要だと判断されているものと推測できる。つまり、「昔からの文化・習慣を大事にする」地域だと考えている人も、そういう地域ではないと考えている人も、ともに昔からの文化・習慣は重視しており、そうであるがゆえに、昔からの文化・習慣を受け継いできたアイヌ民族の人々への支援は重要だと受けとめられているのだととらえられる。「昔からの文化・習慣を大事にする」地域だと感じている人はそのような地域の性格に沿った形で、「昔からの文化・習慣を大事にする」地域ではないと感じている人はそのような地域の問題を改善するという形で、いずれにしてもアイヌ民族への支援が肯定されるという構図が存在するのではないだろうか。

表4-31 地域別・「昔からの文化・習慣を大事にする」への評価別に見た「アイヌ民族に対する教育支援をすべき」の意識

	教育支援 昔からの文化					N
		そう思う	ある程度 そう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない	
札幌市	とてもそう思う	69.2	15.4	15.4	—	13
	ある程度そう思う	26.7	45.3	22.7	5.2	172
	あまりそう思わない	25.9	42.4	28.8	2.9	278
	まったくそう思わない	26.9	41.8	19.4	11.9	67
	合計	27.4	42.6	25.3	4.7	530
むかわ町	とてもそう思う	33.3	31.1	20.0	15.6	45
	ある程度そう思う	12.8	27.4	43.8	15.9	226
	あまりそう思わない	5.9	19.9	50.5	23.7	186
	まったくそう思わない	17.6	23.5	29.4	29.4	17
	合計	12.2	24.7	43.7	19.4	474
合計	とてもそう思う	41.4	27.6	19.0	12.1	58
	ある程度そう思う	18.8	35.2	34.7	11.3	398
	あまりそう思わない	17.9	33.4	37.5	11.2	464
	まったくそう思わない	25.0	38.1	21.4	15.5	84
	合計	20.2	34.2	34.0	11.7	1004

札幌市：p<.01（ χ^2 検定）、むかわ町：p<.001（ χ^2 検定）、合計：p<.01（ χ^2 検定）

注）1. 単位＝人、％。

2. 不明・無回答を除く。

資料：実態調査より。

第6節 まとめ——居住年数が持つ両義的な意味

最後に、本章を通じて明らかになった点を確認したい。

第1に、地域への評価については、一般的な都市と農漁村の特徴が示されていた。すなわち、札幌市では近所付き合いが活発でないけれども、それが新住民にとっては居心地のよさにつながっていた。一方、むかわ町では、近所付き合いも活発で、祖父母世代より以前から暮らしている人々が多かった。その分、昔ながらの習慣も重視されていた。

第2に、アイヌの人々との交流は、居住年数が長くなるほど活発になっていた。札幌市でアイヌの人々と交流している人は非常に限られるが、むかわ町では、半数以上の人たちがアイヌ民族の人たちと日常的な交流を持っていた。とくに、自身の居住年数とともに、家族の居住年数が長い人ほどアイヌ民族との交流も活発なものとなっていた。このことは、家（族）を通じた交流が、アイヌ民族と和人との間に形成されていることをうかがわせる。

第3に、アイヌ文化の保護については、昔からの文化とともに、異なる存在を許容する雰囲気が関わりを持っていた。アイヌ文化の保護に積極的な意識を持つ人々は、現在居住している地域で、

昔ながらの文化が重視される半面、新しいものを取り入れているとも考えていた。この「新しいもの」については、先住民文化を、ある本質的なものに限定する「本質主義」に対し、先住民文化が、抑圧や、その後の復権・再生を経験するなど、時代によって変化し、新たな形態をとりうるという立場と共鳴する部分も見出される。加えて、「新しいもの」は、従来この地域にあまりなかった「異なったもの」を示すともとらえられる。このことから、アイヌ文化は「昔からの文化」であるとともに、「新しいもの」でもあり、また「異なったもの」とも受けとめられるものと思われる。これらを受け入れる素地が当地にあると認識されているか否かが、アイヌ文化の重視と関わっていることがうかがわれる。

さらに第4に、アイヌ民族への経済的援助と教育支援については、昔からの文化・習慣を重視する姿勢との関連がみられた。現在の居住地域が昔からの文化・習慣を重視しているか否かについては、これを肯定する人々も、否定する人々も、ともにアイヌ民族への経済的・教育的支援をすべきとするケースが多かった。このことは、いずれの人々も昔からの文化・習慣を重視し、一方は現在の地域の性格に沿って、他方は現在の地域の問題点を解消するために、昔からの文化・習慣を継承してきたアイヌ民族への経済的・教育的支援を行うべきと考えているものと推測される。

ただし、第5に、アイヌ民族への経済的援助については、家族の居住年数の持つ意味が文化の保護とは異なっていた。端的には、むかわ町では、家族の居住年数が長い人たちほど、アイヌ民族への経済的援助に消極的であった。2点目でも触れたとおり、居住年数の長い人々は、日常的に、アイヌ民族と活発な交流を営んでいる。にもかかわらず、経済的援助には消極的であるのは、日常的な付き合いがあるからこそ、逆に経済的な援助が必要であるようには感じられないということである。その意味では、居住年数はアイヌ民族をめぐる意識において両義的な意味を持っていると捉えられる。この点は、相対的にアイヌ民族との関わりが薄い札幌市民や、むかわ町でも居住歴が短い人たちの方が、アイヌ民族への経済的援助に肯定的な意識を持つことと対をなしている。

このように、限られた範囲ではあるが、アイヌ民族をめぐる交流・文化・経済的援助・教育支援と地域的な要因との関連を探ってきた。そこでは、とくに居住年数が大きな意味を持っていた。しかし、居住年数が長いことは、交流と文化にはプラスに働くが、経済的援助にはマイナスに作用していた。このように、アイヌ民族との交流やアイヌ民族に対する意識は、それぞれの要素によって異なった規定関係を持っている。今後は、地域的な要因に着目しながら、和人とアイヌ民族との交流や和人が持つアイヌ民族に対する意識を成り立たせるメカニズムをより精緻に描いていきたい。

注

- 1) 本研究グループで2012年に実施した新ひだか町での調査には、アンケート調査のなかに一定のアイヌ住民が含まれていたため、一般住民とアイヌ住民の比較を行った(新藤 2013)。しかし、今回の調査データは、「本人がアイヌ」と確定されるものが4人、「配偶者がアイヌ」と捉えられるものが2人と、きわめて少数だった。そのため、今回は対象者のエスニシティを考慮した分析は行えなかった。

参考文献

- 濱田国佑, 2012, 「アイヌ社会における差別の問題——生活史から見る民族内差別」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その2 現代アイヌの生活の歩みと意識の変容——2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書』北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 157-168.

- 本多俊和（スチュアート・ヘンリ）・葛野浩昭・大村敬一，2005，「共同の学問、共生の世界へ」本多俊和・大村敬一・葛野浩昭編著『文化人類学研究―先住民の世界』放送大学教育振興会，319-344.
- 野崎剛毅，2012，「教育不平等の実態と教育意識」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その1 現代アイヌの生活と意識―2008年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書』北海道大学アイヌ・先住民研究センター，59-71.
- ―――，2014，「『アイヌの貧困』の諸リスク」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その3 現代アイヌの生活と意識の多様性―2008年北海道アイヌ民族生活実態調査再分析報告書』北海道大学アイヌ・先住民研究センター，27-44.
- 小内透，2013，「ノルウェー・サーミの概況」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書29 ノルウェーとスウェーデンのサーミの現状』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室，13-40.
- 新藤慶，2013，「地域への評価」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書30 新ひだか町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室，148-166.
- ―――，2015，「アイヌ民族多住地域としての白糠への評価」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書33 白糠町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室，211-229.

（新藤 慶）